

最高の暇つぶし

蛭名 恵

\* 登場人物

笠井守 (20)

山岸タツ (85)

木村武志 (20)

電話の女の声

ラジオアナウンサーの声

電話の呼び出し音

めるか

笠井(20)「もしもし、ばあちゃん。俺、俺

だよ」

電話の女の声「失礼ね。私はまだ孫なんている歳ではありません」

電話を切る音

笠井「チエツ」

電話の呼び出し音

電話の女の声「もしもし、もしもし」

笠井「ああ、ばあちゃん？俺、俺だよ」

電話の女の声「はあ？どなたですか？」

笠井「俺だよ、俺」

電話の女の声「はあ？耳が遠くて、よく聞こえないのよ。今、息子に代わるから」

電話を切る音

笠井「チエツ。今日は当たりが悪いな。今ま

で上手くいった例しが無い。本当にこんなやり方で武志は成功しているのかなあ」

笠井、ため息をつく。

笠井「よし、あと一軒だけかけて、今日はや

電話の呼び出し音

電話の女の声、タツ(85)「もし、もし」

笠井「ああ、ばあちゃん。俺、俺だよ俺」

タツ「ああ、ああ、明宏か」

笠井「(少し焦って)そう、そうだよ、明宏」

タツ「久しぶりだね」

笠井「そうだね」

タツ「元気だったかい」

笠井「いや、それがさあ、大変なことになっちゃって」

タツ「どうしたのさ」

笠井「実は彼女が妊娠しちゃって、俺、学生

だろう。彼女が生みたいって言っても、

金がなくってさ」

タツ「そうかい、そうかい。それは大変だね」

笠井「こんなこと、ばあちゃんにしか相談できなくてさ」

タツ「よしよし、わかった。明宏が困っているんだ。ばあちゃんが力になるよ」

笠井「本当？助かるよ、ばあちゃん。ありがとう。俺、後で絶対、返すから」

タツ「それでお金いくら、いるんだい」

笠井「とりあえず三十万。いや二十万でも」

タツ「わかった。三十万、用意するから、取りにおいで」

笠井「悪いんだけど、バイトで忙しくて、行

けないから、振り込んでほしいんだ」

タツ「振り込み？私はわからないから、取り

においでよ。彼女も連れて」

笠井「・・・」

タツ「明宏、明宏。お金が必要なんだろう。取りにおいでよ」

笠井「うん、わかったよ。だけど、俺は大事

なバイトで忙しいんだ。代わりに友だち

に取りに行ってもらおうから」

タツ「そうかい」

笠井「守っている昔からの友だちなんだ」

タツ「わかった。ばあちゃん、お金を用意して待っているからね」

笠井「ありがとう。ばあちゃん。できればこの話、まだ内緒にしておいてほしいんだ。

彼女の両親にも会ってからのにしたいんだ」

タツ「うん、うん、わかっている。デリケートな問題だからね」

笠井「それじゃあ」

電話を切る音

笠井の笑い声

笠井「やったぜ。やっぱり、引つかかるばあさんもいるんだ」

ファミレスの雰囲気

カップを置く音

ジュースを飲む音

木村(20)「振り込みにしなくて、本当に大丈夫なのか」

笠井「相手はばあさんだ。大丈夫さ」

木村「うまくやれよ」

笠井「ああ、でも、やっぱり、世の中には、簡単に引つかかる年寄りがいるんだな、武志。俺を孫だと思いついて入っているんだぜ」

木村「そうだよな。でも、守、おまえ、昔から少し気の弱い所があるから、気をつけようよ」

笠井「わかつているよ」

木村「万引きしても、逃げるのが遅くて、すぐ見つかるし、本当の名前を正直に言っちゃうしな」

笠井「それは昔のことだろう。もう忘れてくれよ」

笑う笠井と木村。

笠井「それよりはさ、そのばあさん、今は別荘にいらんだって」

木村「本当か。守、おまえが騙されているんじゃないのか」

笠井「大丈夫だって。今回は絶対に金、取ってくるからさ」

吹雪の音

車の運転音

ワイパーの音

カーラジオの音楽

笠井「よりによって、こんな吹雪の日に約束するんじゃないか。チェツ」

ラジオアナウンサーの声「石狩地方に暴風雪警報が出ています。お車でお出かけの方は注意して下さいね」

ワイパーの音

笠井「こんな山の中に住んでいるのか。あのばあさん。本当に別荘なんてあるのか」

カーラジオの音楽

笠井「おお、すげえ、大きな建物。シャレた山小屋だなあ・・・まさかここが？」

車を止める音

車のドアの開閉音

吹雪の中を歩く笠井の足音

笠井「やっぱり、ここだ」

玄関のチャイム音

玄関ドアの開く音

笠井「あ、あの、山岸タツさんですか」

タツ「はい、そうです」

笠井「明宏くんに頼まれてきました守です」

タツ「守？」

笠井「は、はい、守です」

タツ「ああー、明宏の友だちね。まあまあ、御苦労さんでした。こんな吹雪になって、大変だったでしょう。さあ、入って」

笠井「いえ、ここで・・・」

タツ「そんなこと言わないで、中に入って下さいな」

笠井「いえ、頼まれただけですから」

タツ「そんなこと言わずに、さあ。だって、明宏の大切な友だちなんだから、お茶くらい飲んでもらわないと」

笠井「はあー」

タツ「それに明宏の話も聞きたいんだよ、心配でさ」

笠井「・・・じゃあ、少しだけ」

ドアを開ける音

タツ「外は寒かったですよ。今、温かい飲み物でも入れてくるから、座っていて」

笠井「はあ、すみません」

ドアの開閉の音

笠井「(小さな声でつぶやくように)すげえ、りっぱな別荘だな。やっぱり、わざわざ、車走らせてきて正解だったな。それにしてもこのばあさん、金持ちそうだけど・・・」

ドアの開閉の音  
カップをテーブルに置く音

タツ「若い人はやつぱり、コーヒーかね。コーヒー飲めるんでしょう。私は最近、エスプレッソばかりだから、口に合うかどうかかわからないけど」

笠井「はい、すみません。いただきます」

コーヒーを飲む笠井。

笠井「ミルクと砂糖、入れていいですか」

タツ「どうぞ、どうぞ。子どもには苦すぎたね。ごめんよ。私も85で初めてこのエスプレッソのおいしさがわかるようになって。わざわざエスプレッソマシーンも買ったんだよ」

笠井「85才ですか」

タツ「そう、85才よ」

笠井「若いっすね」

タツ「うれしいこと言うのね、守君は」

笠井「いえ」

タツ「もつとおばあさbかと思ったんでし

よう、ハハハハ」

笠井「そんな・・・」

タツ「明宏は元気かい」

笠井「は、は、はい」

タツ「明宏は困った子だね。守君にまで迷惑

かけて、すまんね」

笠井「いえ」

タツ「守君も学生さんかい？」  
笠井「戸惑いながら」は、いえ、フ、フリーターです」

タツ「じゃあ、明宏とはどこで知り合ったんだい」

笠井「(少し焦った感じで)バ、バイトで」  
タツ「そうかい」

笠井「あ、あのう、僕、明宏の使いで来ただけですから、早く、帰らないと・・・」

タツ「まあ、いいじゃない。コーヒーも全部飲んでいないし、来たばかりだしさ。持つていってもらう物を用意してあるから心配しなさんな。そうだ、ケーキもあるよ。持つてくるね」

笠井「あ、あの、もう本当にいいですから」  
いすから立ち上がり、出て行くタツ。  
ドアの開閉音

笠井「(小さな声でつぶやくように)チェツ、困ったな。あのばあさん。早く、金だけ出せばいいのに」

窓に吹きつける風の音

笠井「ヒエー、すげえー雪だよ。完全にもう、吹雪だ。早く帰りたいよ。車も完全に雪に埋もれてる。ばあさん、早く、してくれよ。(小さな声で)俺はばあさんから金を取りにきたんだぜ。コーヒー、飲み

来たんじゃねえんだよ、本当は。ばあさんは暇つぶしかもしれないけど、俺は必死なんだよな。絶対、上手くやって、意志の鼻もあかしてやりたいんだよ。それにしても、あのばあさん、何者だ。エスプレッソコーヒーの味？俺にわかるわけねえだろうが。いつもインスタントしか飲んでないのに」

窓に吹きつける雪と風の音

ドアの開閉音

タツ、入ってきて、いすに座る

皿を置く音

タツ「銀行の人がたくさん持つてきてくれるんだけどね。私ひとりじゃ食べきれないんだ。いつも困ってるんだよ。守君、好きなだけ食べていいからね」

笠井「すごい、たくさん。うまそう。銀行の人がそんなにたくさん持つてくるんですか。金持ちー。僕ん家、銀行からティッシュももらったことないんですよ。サラ金のティッシュはたくさんあるけど」

笑うタツと笠井

タツ「いやあ、守君とは初めて会った気がしないんだよ。これも歳のせいかな。この頃、若い人と話をしていないからね」

若い人の声は皆、明宏の声に聞こえて……」

笠井「驚いた声で」そ、そ、そうですか」

タツ「明宏も大学なんかやめて、私の仕事を手伝えばよかったのにな」

笠井「何の仕事ですか？」

タツ「まあ、ちよつと。危険な仕事でもあるけど、いろいろね。これでも金儲けはうまいんだ。ばあさんだけ」

笠井「そうなんですか」

タツ「誰も手伝ってくれなくてね。ほとんど今は他人まかせなんだよ」

笠井「へえ……」

タツ「ほら、ケーキ、たくさん食べてよ。若い人はたくさん食べないと」

笠井「は、はい」

食器の音

笠井、ケーキを食べ、コーヒーを飲む。

窓に吹雪の風が吹きつける音

タツ「いやあ、外はすごい吹雪だよ」

笠井「(口にケーキを入れたまま、驚いて)ほ、本当だ。通行止めになる前に帰らないと」

タツ「道はとつくにふさがっているよ」

笠井「(焦って)そ、そんな。僕、帰れないじゃないですか」

タツ「心配ないよ。まあ、ここにいればいいさ。吹雪がおさまるまで。吹雪がおさま

つても山の中だから、道が開くまで、時間がかかるけどね」

笠井「悪いですよ、それじゃあ」

タツ「明宏の友だちで知らないわけじゃないし、遠慮しないで」

笠井、ため息をつく。

タツ「さあ、心配しないで、たくさん、たべなさい。何とかなるよ。長い人生を送ったばあさんが言うんだ。間違いないよ」

笠井「(開き直った少し高い声で)そ、そうです」

すね」

ケーキをムシヤムシヤと食べる笠井。

タツ「やっぱり、若い人の食べっぷりはいいね。久しぶりに見たよ」

笑っているタツ

笠井「この別荘暮らしは長いんですか？」

タツ「ああ、この別荘ね。私は気まぐれだから、家に帰ったり、マンションに行ったり、いろいろさ」

笠井「そんなに住む所がたくさんあるんですか。金持ちは違うなあ。うらやましい」

タツ「そうかい。たくさんあってもね……。やっぱり私の原点に戻ってきちやうんだよね。明宏と暮らした場所だし

ね……」

吹雪の音

タツ「そろそろ、夕食の用意でもするかな。今日はお手伝いさんが来ない日だから、私の手作りですまないけど、おいしく作るから、待っていておくれ」

笠井「す、すみません」

タツ、立ち上がり、出て行く。

ドアの開閉音

笠井「もう、こうなったら、運を天にまかせるしかないな。ばあさん一人暮らしだし、こんな吹雪に人も来ないだろう。何とかなるか。金をもらえるんだ。がまん。がまん。それにしても、いったい、何の仕事をしているんだろう。少し、興味もあるな」

除雪車の音

笠井「おお、道を開きに来たな。吹雪も少しおさまってきたのかな」

ドアの開閉音

タツが入ってくる。

タツ「除雪車だね。せっかく、夕食を用意し

ているから食べていっておくれよ、守君

笠井「(元氣よく)は、はい。せっかくなのでいただきます。もう道も開いたから、いつでも帰れますので」

タツ「そうかい。今日はイワシの梅干し煮、黒豆、筑前煮、けんちん汁。明宏の好物になっちゃったよ」

笠井「はあー。渋いっすね」

タツ「そうかい。明宏は和食好きでね。守君は？」

笠井「僕はハンバーグとかラーメンばかりで時々、牛丼も。しばらくそんな食事してないなあ」

タツ「じゃあ、ちようどよかったね。御飯が炊き上がるまで、もう少し待っていて」

### 除雪車の音

笠井「あのう、さつき話していた危険な仕事って何ですか？」

タツ「ああ、あれね。守君も興味あるんだね。初めはこの土地で農業していたんだよ」

笠井「農業？」

タツ「そうさ。朝から晩まで大変だったけど、それなりに充実していたんだ。米とかイモとか作ってたさ」

笠井「そうなんですか」

タツ「でも、いろいろあって、土地を売ってさ。まあ、守君にはこんな話、関係ない

ね」

笠井「はあー」

タツ「今の仕事は年寄り相手の仕事なんだ。まず、年寄りを集めて、おもしろい話をしながら、日用品を100円単位で安く売るんだ。年寄りは暇だから、どこからともなく集まってくる。そうでしょう守君」

笠井「はあー」

タツ「年寄りには小金を持っているし、話がおもしろくて、一日過ごせたら、最高なんだよ。そこで最終的に高額商品を売ることさ。(大きな声で)どう、守君もやらない？儲かるよ」

笠井「いえ、そういう仕事は……」

タツ「残念だね。守君ならできそうなんだけどね。意外と真面目で堅実なんだね」

笠井「はあー」

タツ「人間、真面目に働いていても、金儲けはできないよね。時には人を騙すくらいじゃないとね。そうさ、この仕事の話は内緒にしておいておくれよ。この頃、警察も、うるさいからさ。それに、前科もあるし……」

笠井「(驚いた声で)ええー」

タツ「何を焦っているんだい。前科と言っても、この仕事で付いたんじゃないよ。いつも騙している方の私が詐欺にあっちゃってね。それで、私、頭にカーツと血が上って、切れちゃって、(大きな声で)エ

ーイって」

テーブルの上の食器がぶつかる音

タツ「あら、ごめんなさい。私、すぐ興奮するから。気をつけないと、血圧が上がるわね。でも、守君も私の気持、わかるでしょう。他人に騙されるのよ……」

笠井「(泣きそうな声で)は、は、はい」

タツ「すつかり、風邪もおさまってきたわね。もう、御飯、炊けたかしら。夕食、用意してくるわね」

タツ、立ち上がり、出て行く。  
ドアの閉閉音

笠井「やべえー」

笠井、いすから立ち上がり、出て行く。  
ドアの大きな閉閉音。

雪道を走る笠井の足音。  
車のドア閉閉音。

車のエンジンを何度かかけるがかからない。  
やっとうエンジンがかかる音。

笠井「何か、あると思っていたけど、あのばあさん、やっぱり只者じゃねえよ」

タイヤが雪道をすべる音

笠井「立派な詐欺じゃねえかよ。前科まであるとは。オレ、オレ詐欺より悪いよ。俺も危なく、ひっかかるところだった」

車の走る音。

仏壇の鈴の音

タツ「明宏じいさん、今日のは意外に礼儀正しくて、嘘の下手ない子だったのにね。私の嘘の方が上手だったんだね。少しくらいお小遣いを渡そうと思っていたけど、逃げて帰っちゃったわ。あんたが死んだから、私は芝居が上手くなつたんだよ。一人じゃつまらないよ・・・早く迎えに来てくれないと、ますます演技に磨きがかかるよ」

電話の鳴る音。

タツ「また、誰か知らない人がかけてきたのかね。明宏じいさん、まだ当分、退屈しなさそうだよ、ハハハ」

タツの笑い声。

電話の鳴る音が響く。

終